

# ウエリントン留学記



松枝 法道 教授

滞在中の主な研究テーマは、環境政策がどのようなに決定され、異なる政治的環境が政策決定の結果、ひいては社会全体にどのような影響を与えるかについて経済理論の観点から考えると、  
 いうものでした。経済学のベンチマークとして、政策決定者は常に世の中全体を見渡して「最大の多数の最大幸福」を追求するべきだという考え方があります。具体的な政策によって、時には得をすることも、時には損をすることもあるで

今回、半年間の学院留学の機会を得て、ニュージーランドの首都であるウエリントンにて妻と息子二人と共に生活しました。もう10年以上も前になる新婚旅行を含め、学会の機会や個人的な旅行を通じて、これまで幾度もニュージーランドのすばらしい自然やバラエティーに富んだ飲食物を楽しんできましたが、この国のペースに浸ってゆっくりと過ごした時間はまた格別なものと感じました。

ウエリントンの人口は周囲の町を含めても50万人ほどと比較的少なく、金融街や政府関係の建物が立ち並ぶ通りでさえも、どこかのんびりとした雰囲気漂っています。ウォーターフロントも非常にきれいに整備され、博物館、公園、カフェ・バーが連なった湾沿いの地区では、夕刻になると、みんなビールジョッキやワイングラスを片手に何かを熱心に語っています。旅行ガイドブックであるLonely Planet誌の2017年の調査ではウイーンやメルボルンなどを抑えて「世界で最も生活の質が高い街」に選ば



ニュージーランドの国会議事堂の一部  
 (通称『ハチの巣 (ビー・ハイブ)』)

しようが、個々の政策が常にそのような姿勢から決定されていけば、長い目で見れば一人一人にとってなかなか良い結果が生まれるはずだというのがその中心的論拠です。

しかし、実際の政策決定のプロセスはどうでしょう。「ポリティカル・エコノミックス」という分野では、政策決定者といえども次の選挙での結果や個人的な利害など自分自身の立場に多かれ少なかれ関心があって、必ずしも「慈悲的な独裁者」として行動するわけではないと考えます。現在、さまざまな状況において政策がどのように決まっているかについての分析フレームワークが整理されてきています。そのうちのひとつに企業や特定利害団体による「口



研究室のあったピピテア・キャンパスの建物

「ビー活動」の影響を考察するものがあります。ウエリントンの街では、高層ビルの側面に大型旅客機や時には軍用機の巨大な宣伝広告が掲げられることがあります。これらは全て政治家や官僚に向けたもので、目の届かないところでも様々な「工作活動」が行われていることは想像にかたくありません。人口比では世界一多いと言われるレストランがウエリントンの政治・ビジネス街にひしめきあっているのはこのような背景もあるのではないかと思います。

留学先のピクトリア大学はウエリントン市内に三つの主要なキャンパスを持っており、私が研究室を借りていたのは国会議事堂と鉄道駅にはさまれた高層の建物で、ピピテア・キャンパ

スの一部でした。一番驚いたのはIT関連の設備で、どんな小さい教室にも必ず一台は最新の電子黒板がありました。図書館の電子書籍サービスも充実しており、設備の面では欧米の大学にもまったく引けをとらないと感じました。

留学期間も残りわずかとなった2018年2月に、関学経済学部から東田教授、猪野准教授にお越しただいて、ピクトリア大学の研究者との二大学間のジョイント・ワークショップを初めて開催しました。丸一日頭をフル回転させて、その後はみんなで楽しく飲んで食べました。私の新しい夢に、このジョイント・ワークショップの第二回目を関学のキャンパスで行うことが加わりました。



近所のカフェにて